

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金  
大学院生研究 2015年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科 コミュニティ福祉学専攻	
指導教員	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学研究科教授	結城俊哉
研究課題名	精神障害者家族の「友人」に対する役割期待	
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名
	コミュニティ福祉学研究科コミュニティ福祉学専攻2年次	田中祐一郎
研究期間	2015年度	
研究経費	100千円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

精神障害者とその家族が生活する上では、家族に大きな負担がかかる。理由としては、障害の受容や専門的知識が乏しい状態で日常的に精神障害者と関わらなければならないためである。

そこで、精神障害者家族の支援について検討する必要がある。精神科医や精神保健福祉士といったフォーマルな支援の必要性についてはこれまでの研究で明らかになっている。しかし、友人の様なインフォーマルな関係は十分な研究がされてこなかった。したがって本研究では、今まで注目されてこなかった友人というインフォーマルな関係に対し、当事者がどのような役割期待を抱いているか明らかにする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[精神障害者家族] [友人] [役割期待]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の目的は、フォーマルな関係とは別に、友人というインフォーマルな関係が、どのような役割を担う可能性があるかを解明することが目的であった。目的の理由としては、精神障害者家族の支援の幅を広げることができるかの検討、精神障害者家族が友人に何を求めているかを明らかにして、関わりを持つ上での参考にして欲しいと考えたためであった。

先行研究を調べた結果、①精神障害者の施設入所や家族の監督が長きに渡り主流であったため、社会の精神障害者に対する理解が乏しく、家族が精神障害者を監督する風習が今なお続いていること②精神障害者家族は 1960 年代まで病因性に着目した研究が行われ、家族支援に関する研究は 1970 年代以降に始まったこと③精神障害者家族が精神障害者を支援する際、身体的負担、精神的負担を感じる人が多いので、家族への支援が必要なこと④家族を直接支援する他に、精神障害者を支援することも家族支援につながる事⑤精神障害者家族が現在の支援に満足していないこと⑥家族の精神障害者に対する感情や言動が病状に影響すること⑦友人が何らかの形で精神障害者家族を支援できる可能性があること⑧精神障害者家族会は、精神障害者家族にとって大きな存在であるが、ニーズをすべて満たすことができるわけではない、ことが明らかとなった。現在の専門職や家族会による支援が完璧でないからこそ、友人に関する研究が必要であると考えた。

そして、精神障害者家族が友人に対してどのような役割期待を抱いているかを明らかにするために、アンケート調査を行った。その結果、精神障害者家族は、精神障害とは関係のない、日常的なやり取りで時間を過ごすことを、友人に求めていることが分かった。しかし、今回のアンケート調査において、病気のことを友人に伝えている精神障害者家族は、およそ 7 割いた。

そこで、精神障害者家族は、友人に対してなぜ精神障害に関する話をするのかを検討し、話をするを通して、どのような役割期待を抱いているかをインタビュー調査で明らかにすることを試みた。

その結果、友人の様なインフォーマルなサポートと、専門職の様なフォーマルなサポートが互いに補い合って、精神障害者家族の地域生活を支え合う必要性があることが明らかとなった。

また、精神障害者家族は、友人に対して、「聴くことへの役割期待」と「性格・環境への役割期待」を抱いていることが明らかとなった。

精神障害者家族が友人に対し、精神障害に関する話をすることによって、精神障害者家族が自身の状況を整理出来る。これらより、精神障害者家族が期待している友人の「聴く」という役割はとても重要であることが分かった。

友人の存在は、精神障害者家族の支援の幅を広げることが可能であり、精神障害者家族は友人に対し「聴く」ことを求めていることが明らかとなった。「性格・環境への役割期待」を友人に対して抱いていることも分かったが、環境や人柄はそれぞれの生い立ちが関係しているため、外部の介入による変化は難しい。だからこそ、どうすれば友人となりうる人物の「聴く」力が充実するか検討する必要がある。

「聴く」力を身に付けるために理解する場が必要であり、幾つかの機関が、理解を深めるために普及活動などを行っている。しかし、一般の人々が普及活動に興味を示さない場合もある。また、友人にとって「聴く」役割がどのような負担になるかが不透明である。精神障害についての話を「聴く」ことの負担が大きすぎた場合、「聴く」こと自体を拒否してしまう可能性もある。そこで、一般の人々の「聴く」力を養うだけでなく、精神障害者家族が、友人の様に気軽に話を出来る人物、コミュニティを設ける必要があると筆者は考える。

### 研究成果の概要 つづき

精神障害者家族のコミュニティは、精神障害者家族会がある。しかし、精神障害者家族会では、集まって様々な活動を実施するため、話を十分に出来ない場合も考えられる。そこで、友人の様に、話を「聴く」、精神障害者家族のための傾聴ボランティアの様なものが充実の必要となる。

傾聴ボランティアは、社会福祉協議会などで紹介されている。なので、精神障害者家族が「聴く」人を見つけやすい環境を、傾聴ボランティアの主催者や社会福祉協議会がいかにして作っていくかが大切である。

また、精神障害者家族のためには、似たような境遇の人物の中で、「聴く」ことに関心を抱いている人物を探すことも必要である。精神障害者家族の話を「聴く」人が増えることになれば、精神障害者家族の地域での生活の支援になり、友人の「聴く」負担も和らぐのではないだろうか。このように、精神障害者家族が地域で生活していくためには、自身の思いを打ち明けることの出来る人や場所を地域全体で作っていくことが欠かせない。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①田中祐一郎、精神障害者家族の友人に対する要望や期待—精神障害者家族会への量的調査を通して—、まなびあい、第8号、2015、pp.134～146